

機会の創出の重要性

—小嘶ワークショップで見られた学習者の発音の向上—

中野二郎（ヤギェロン大学）

【要約】

コミュニケーションのための日本語教育が叫ばれる一方で、現場では「言語教育のための言語教育」という殻から抜け出せない現状が散見される。新しい研究成果から様々な教育方法、学習方法が開発され、学習者にはよりよい環境が提供されやすくなったが、習得言語はその言語社会と関わることで初めて意義を持つ。また、社会参加を前提とする言語学習は、モチベーションも保つことができ、学習にも積極的な姿勢がみられることが多い。そのための機会の創出は教師にとって非常に重要な業務であるとする。本稿では、筆者がポーランドに於いて取り組んだ事例（小嘶ワークショップ等）を、機会の創出、提供という視点から紹介する。

1. はじめに

筆者は日本、ポーランドでフレージング、VT法をはじめとする指導法を実践してきたが、方法もさることながら学習者のモチベーションの重要性を痛感してきた。発音習得は言語学習の中では羞恥心による心理的フィルターがかかりやすい分野だといえる。筆者は発音がうまく習得できない場合の不利益（意図が伝わらない、実際とは異なるバーソナリティの出現等）を説きながら、音声習得の重要性を学習者諸君に伝えているが、文法、文字等の習得に比べて“副次的な色合い”が強く、後回しにされる傾向がみられる。従って、指導の効果が学習者によってまちまちというのが印象である。

しかし、スピーチ大会に出場する学生の本番直前の発音練習へのモチベーションやそれを通じた能力の向上を目の当たりにするにつけ、「やればできる」ことを実感する。「やる」モチベーションを促すのに、平素から「機会の創出が学習者の言語能力向上に如何に大きく資するか」に関心を持ってきた。その関心が更に強くなったのが、2013年11月にクラクフ市で行われた落語口演に伴う小嘶ワークショップでの指導であった。本稿では、その際筆者に如何なる気づきが起き、以降のどのような試みに繋がったかを述べる。

2. 先行研究

本稿自体研究というよりは報告書の体をとっているが、アメリカでの小嘶ワークショップの取り組み、学習者の社会参加に焦点を当てた取り組みを紹介しておく。

畑佐・久保田（2009）「一人で演じる日本語会話：小嘶プロジェクトの実践報告」では、学習者のコメントとして、以下のような記述（抜粋）が残っている。

- ・自分の発音のあいまいさに気づいた。
- ・お客さんが分かってくれて笑ってくれるようにするために一生懸命練習した。
- ・友達と練習する過程で自分の問題にも気づくことができた。
- ・友達と面白くするための工夫について話し合うことができた。

- ・コミュニケーションには動作も重要だということが分かった。
- ・プロの落語家の技術はすごいと思った。

普段から恐らく教師が教室で触れているであろう知識が、発表の機会をきっかけに「実感」につながったと想像できるようなコメントが多い。

鈴木（2014）は言語学習と社会参加の関係について以下のように言及している。「このような言語学習観は、学習者の社会参加を可能にする機会を作りだしてきたとは言えないのではないだろうか」。ここでいう「このような言語学習観」とは4技能をバランスよく習得するように明確に示す能力別の教育、学習観念を示す。教室活動が言語能力の育成のみに焦点を当てるのではなく、社会参加することで異文化対応能力が高まることを示唆している。

3. 小噺ワークショップの概要

筆者が特に「機会の創出」に着目する契機となったイベントを紹介する。

国際交流基金主導で、2013年11月にブダペスト日本文化センター、日本技術美術博物館（ポーランド、クラクフ市）、パリ日本文化センターにて、プロの落語家による落語口演が行われた。行事の主な目的は日本の話芸を現地の人々に紹介し、鑑賞してもらうことである。はるばる渡欧してくださった柳家さん喬師匠、柳亭左龍師匠の口演に先立って、地元の学習者が小噺を披露することとなった。パリ、ブダペストではセンターの講座に通う学生が、クラクフではヤギェロン大学日本中国学科、マンガ日本語学校に通う学生が対象となった。

筆者は2013年9月にポーランドに赴任し、前任者から引き継いだ小噺指導を行うこととなった。指導は週1回、90分程度4週に渡って行った。発表者は11名、うち5名（修士1年生1名、学士1年生4名）は内容は以下の通り。

- 1回目：落語の基本（上手^{かみ}、下手^{しも}、老若男女のしぐさ等）をビデオで説明、既存の小噺（サイト初級者からできる日本語学習者による小噺プロジェクトから抜粋）をスクリプトで配布。自身が発表する小噺を決定。
- 2回目：囃子をかけながら、入退場の練習。スクリプト（OJADを利用してつけたイントネーション・カーブを示したもの）を見ながら、意味が通じるように発音練習。
- 3回目：囃子をかけながら、入退場の練習。体の向きを変えながら、役になりきってスクリプトなしで情緒を込めて発音練習。
- 4回目：本番同様の予行練習。
- 5回目（発表前日）：師匠直々の指導。

また、参考のため、発表した小噺の例と特に注意した点は以下のとおりである。

（小噺1）

こども：おまわりさん、助けてください。あそこで父さんが男とけんかをしているんです。

警察官：よし、わかった。それで、どっちが君のお父さんだい？

こども：それがけんかの原因なんです。

注意点

- ・ こどもは“見上げる”、警察官は“見下ろす”
- ・ ～だい？は上昇調イントネーション
- ・ “下げ”はクローズアップのため、前向き、スピードを緩めはっきり発音。
- ・ 「ゲンイン」が難しい場合、「ゲーイン」も可

(小噺2)

客：あら～すてきな絵ですこと。ルノワールですわね。

係員：いいえ奥様、それはダビンチでございます。

客：あ～らこちらも素敵、ダビンチですわね。

係員：いいえ奥様、それがルノワールでございます。

客：あら、この絵なら私にもわかるわ。ピカソよね。

係員：いいえ奥様、それは鏡でございます。

注意点

- ・ 客は貴婦人のイメージで、高い声で。
- ・ 係員はできるだけ抑えた落ち着いた話し方で。
- ・ 外国人の名前、ポーランド語や英語訛りにならぬようはっきり。
- ・ “下げ”はクローズアップのため、“それは”の後、大胆に間を空けてゆっくり“かがみで…”

落語に関しては素人である日本語教師陣が指導したこともあって、5回目の師匠の指導の際には、多くの反省点を感じ、学習者諸君には申し訳ない思いもあったが、観衆の笑いと盛り上がりを見るにつけ救われた気分であった。師匠お二人は、海外での日本語学習指導、口演のご経験が豊富であり、口演会は大好評のうちに終わった。この成功に学習者たちが前座で行った小噺が花を添えたのはいうまでもない。講演後挨拶のため舞台上立つ学習者たちの誇らしげな表情が印象的であった。

4. 教師の気づき

筆者の勤務先であるヤギェロン大学文献学部東洋学研究所日本中国学科は、名前の通り日本研究を目的とする学科で、日本文学、日本語学、日本史、日本伝統文化等知識的な科目が充実しているのに比べ、運用力を養成する科目は充実していない。従って、教師、学生の意識も「日本について知る」ことに向いており、「日本語を自在に操る」ことにはさほど向いていない印象である。また、国民性もあろうが、日本語で話すことに対して羞恥心から非常に消極的な印象を受けていた。そんな学生たちではあるが、小噺の指導を通じて以下のような変化が見られた。

- ① 普段はシャイな学生たちに、教師に自身から質問する積極的な態度が見られた。
- ② どのように「音を発するか」ではなく、声の大きさ、イントネーション等観衆に声がどのように「伝わっているか」に意識が向いていた。
- ③ 聴衆を笑わせるという目的のため、間（ポーズ）を意識した。

日本語音声についての知識は、1 年生前期に日本語の音声についての座学的な授業もあり、実用日本語の授業でリズム・イントネーションに焦点を当てた指導も行っているため、ある程度は持っていると考えてよい。但し、授業中に「重要である」と呼びかけるだけでは著効を得られていなかったのが現実である。②、③のような言語知識が、①の取り組み方の変化が導火線となり、能力向上につながったと言えるが、その導火線に火をつけたのは、「約 200 名の聴衆の前で日本語で小断を発表し、笑いをとらなければならない」という課題であっただろう。その場（＝機会）が 1 か月後に控えているからこそ、普段学生を抑制している羞恥心から解放され、発音の課題に立ち向かうことができたのではないだろうか。大学生のうち 4 名は、1 年生で、その時点では日常会話もままならぬレベルであったが、10 秒から 20 秒程度の小断をほぼ完璧にマスターした。

とにかく、この一か月の学生たちの取り組み方、発音能力の向上は目を見張るものであり、ある程度難しい課題（日本語で観衆を笑わせる）であること、その言語で社会に参加すること、このうちのどちらが（或いは両方）学習者を刺激したのかは不明であるが、“機会の創出”がモチベーションにつながった好例である。その後筆者は、「二匹目の泥鰻」を狙おうと、教室活動に力を入れるだけでなく、任期（2013 年 9 月～2016 年 9 月）の間、機会の創出を念頭に業務をこなしてきた。随時学習者にインタビューやアンケートを取ってきたわけではないため、検証は若干難しいが、それらをここで紹介する。

5. 機会創出の例

5.1 ポーランド文化発信の機会

幸いヤギェロン大学はポーランドにおける代表的な日本語教育機関の一つとして、日本の教育機関と連携する機会が多い。従って、日本の大学生、高校生の訪問を受ける機会が得られる。筆者は懇親会で仲良くなるだけではなく、これを「ポーランド文化を日本語で発信する機会」として、プレゼンテーションの機会を設けるよう努めた。大学の研究のためには「読む」、「聞く」スキルが重要になるが、自身の文化を発信するためには、「書く」、「話す」スキルの向上が欠かせないと考えたからである。ポーランド人には控えめな人が多い印象で、日常の中で自身の文化を強くアピールする学生はあまり見られなかったが、「自身の文化を知ってもらいたい」という感情がないわけではなく、知ってもらうことで満足が得られるはずである。また、学生諸君は同世代、或いは年下とは言え、面識のない日本人に“ポーランド代表として”文化を伝えるというタスクに責任を感じ、小断のワークショップのように発音習得に積極的な態度が見られた。

余談であるが、クラクフを訪問した大学生、高校生にとっても、日本語でポーランド文化について話が聞ける貴重な機会になり、また同世代の若者として「自身が外国語で日本文化を紹介できるか」と考えたりし、大いに刺激になったとのことである。

5.2 大学、学科紹介の機会

クラクフ市は日ポ友好の象徴ともいえるべき日本技術美術博物館（通称：Manggha）があるため、の要人の訪問が絶えない。ポーランド国内では、創立に関わったアンジェイ・ワイダ監督をはじめとして、ワレサ議長（初代大統領）、日本からは 2013 年には首相夫妻、2014 年には首相夫人、2015 年高円宮妃殿下の訪問を受けた。首相夫人が学科を訪ねた際や、その他、在ポーランド日本大使も学科を訪れた際に、教員のみが対応するのではなく、大学や学科については、学生がプレゼンテーションを

行うよう働きかけた。

首相夫人、大学の学長、学科長、シークレットサービスに囲まれた中でのプレゼンテーションは緊張感に包まれたものであったが、学生は大学を代表する名誉と責任を感じながら、見事に大役を果たした。この際には、発話能力が非常に高い学生たちにも、筆者に発音面でサポートを求める等日ごろ見られない積極的な取り組みが見られた。

5. 3 日本語弁論大会

いわゆるスピーチ大会で、各国で行われる行事であるので、特筆すべきものではないが、同様に取組む姿勢に大きく変化が見られたので記述しておく。まず、ポーランドの日本語弁論大会は歴史が古く、2016年で既に37回を迎えている。日本国内で行われるスピーチ大会に負けず劣らず、非常にレベルの高いパフォーマンスが見られる。

他の行事と異なるのは、評価されるという一点であろう。多くの日本人の観客、指導を受けた日本語教師に見てもらえるだけでなく、受賞できるか否かという結果が出ることは、ある意味残酷ではあるが、ある意味やりがいのあることである。

ヤギェロン大学からは例年3名の弁士が出場し、練習担当は筆者が担当していた。筆者は筆者なりの理想的なスピーチがあるが、トップダウン式に押し付けることはせず、「どうすれば、言いたいことが伝わるか」を弁士と考えを深める工夫をしている。賞がもらえるか否かは時の運としても、2~3週間の練習の中で学生には多くの気づきが見られる。弁士となった学生にインタビューして得られた音声についてのコメントは以下のようなものである。

- ・自身の日本語を初めて聴いた。
- ・ポーランド語のアクセントがある日本語がどんなものか気づいた。
- ・間の重要性に気づいた。
- ・(他の弁士を見て) 声のメリハリで表現力が増す

筆者は関わっていないが、上記以外にも日本語教育では演劇を取り入れる試みも各地で行われている。「コンテンツをより重視し、発表の機会を設けて社会とつながる」という意味で、言語そのもののみの能力向上を目指した教室活動では身につかない能力が身につくものと期待できる。その他コンテンツは様々で、カラオケ大会、アフレコ大会等数え上げるとキリがないが、イベントは息抜きではなく、学習言語を社会とつなげる重要な機会であると捉えると、教師の立場から「機会の創出」は「できたらいいな」というプラスアルファの業務ではなく、肝となる業務である。

6. まとめ

発音に限らず、言語教師は教室活動、自律学習など教育方法、学習方法のみに目を向けがちである。このスタンスで実践研究が進み、教師や学習者に指導法や学習法の選択肢が増えるのは望ましいことであるが、「何のために学ぶのか」という学習動機を高めることに関しても現在以上に目を向けていいのではないかと。機会の創出は、その自治体や教育機関が担当することであり、教師の仕事のスキーム外のことと考えがちである。実際、資金が必要な場合などその通りかもしれない。しかし、教師が働きかけをすることで、実現につながるケースもあるに違いない。

最後に、日本語教育にかかわる者として喜ばしい出来事の一つ紹介して本稿を締め括りたい。2016年4月14日に起きた熊本地震の被災者を見舞うための募金活動が6月初旬にクラクフ市で行われた。学生サークルKAPPAが自主的に開催したイベントである。冒頭でも述べたが、シャイな印象が強いポーランド人学生が日本語でも募金を呼び掛ける姿を見るにつけ、日本人として有り難いと感じるのは勿論のこと、彼らにとって日本語が社会とつながるためのツールとして機能していることに喜びを感じた。筆者の取り組みが直接関係してこのイベントが行われるに至ったとは思わないが、このような取り組みを行う際に“参加をためらわない”だけの経験はしたし、その能力も身につけていたことを誇りに思った。教師は教室活動は勿論のことだが、教室外で学習者にチャンスを与える努力、機会を創出する努力も重要な業務であることを実感した3年間であった。全世界で行われている様々な日本語学習者たちのための機会を創出、企画・運営に関わる教師、関係者の皆様に、そして、その機会を積極的に生かし、自身の能力を高めている学習者の諸君に改めて敬意を表したい。

参考文献

論文

鈴木 (2014) 日本語習得過程におけるネットワーク形成と社会参加ー在日インド人ビジネスパーソンの事例からー

http://www.suzuki-japanese.com/img/20151213_Manana_SUZUKI.pdf#search=%27E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E7%BF%92%E5%BE%97%E9%81%8E%E7%A8%8B%E3%81%AB%E3%81%8A%E3%81%91%E3%82%8B%E3%83%8D%E3%83%83%E3%83%88%E3%83%AF%E3%83%BC%E3%82%AF%E5%BD%A2%E6%88%90%E3%81%A8%E7%A4%BE%E4%BC%9A%E5%8F%82%E5%8A%A0%27

畑佐・久保田 (2009) 一人で演じる日本語会話：小嘶プロジェクトの実践報告

<http://www.princeton.edu/pjpf/pdf/07-hatasa-kubota.pdf#search=%27E5%B0%8F%E5%99%BA+%E6%97%A5%E6%9C%AC%E8%AA%9E%E6%95%99%E8%82%B2+%E8%AB%96%E6%96%87%27>

学習サイト

OJAD (日本語オンラインアクセント辞典)

<http://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/ojad/>

初級からできる日本語学習者による小嘶プロジェクト

<http://tell.cla.purdue.edu/hatasa/rakugo/rakugobystudents.html>

刊行物

ヨーロッパ日本語教師会 Newsletter51号 (2014年) 小嘶ワークショップ (中野、上間)